

飛耳長目

通巻167号 平成29年10月1日発行

「修身教授録」探求（第三百二十一回）

一 女同士の交際

森信三

わが部屋の畳をかへて心すがし

昨日も今日も一人居にけり

赤彦

これは赤彦の歌の中でも、もっとも平凡な日常吟の一つと行ってよいでしょう。ですから、あなた方なども「これくらいに歌ならわたしだつて出来るわ」といいたい処でしょう。実さいちよつと考えますと、誰にでも出来そうですが、しかしイザやってみるとなつたら、そうは問屋がおろさないでしょう。それというのも一見平凡としか見えないこの一首の中には、赤彦という一人の人間の全力量が、静かにたたえられているからです。ですから川などで言つたら激流となっている処ではなくて、静かに水の淀んでいる処ともいえましよう。

■男同士の交際とは異なる

交際ということの大切なことは、今さら申すまでもありませんが、しかし女同士の交際ということになると、男同士のそれと比べて、よほどむずかしい処があるように思われます。もちろん男同士の交際でも、決して容易とは言えないでし

よう。現に昔の教えにも「朋友と交つて信あり」とありますが、これは一面からは男同士の交りにおいてもほんとうに信義を尽くすということは、必ずしも容易でないことの証拠ともいえましよう。しかしいま女同士の交際を、男のそれと比べてみますと、よほどむずかしい処があるように思うのです。しかもこの点現代の若い女性は、果たしてどの程度心得ていると言えるでしょうか。もし女同士の交りを男同士のそれのように、比較的容易なものと考えていたら、あるいは意外な間違いが起ころぬとも言えないでしょう。また世間を見ましても、どうも女同士の交際はとかく色々と問題が起り易いように思われますので、今日はこの点について二三お話しして見たいと思います。なお序ですが、男女間も交際のむずかしいことは、これは今さら申すまでもないことで、男女間の交際は、それが円満に結婚の実を結ぶに到らない場合は、程度の差こそあれ結局、男女のうちいずれか一方、または双方が傷つくに終ると断言してよいかと思えます。そこで男女間の交際は、つねに何らかの意味で生か死か、結実か破滅かという危機を含むものと承知しているべきでしょう。しかしこ

ここでは男女間の交際の問題に深入りしようとは思いません。それは別に機会を得て、改めてお話ししたいと思うからです。

■往來の問題

さて元へもどつて女同士の交際ですが、そもそも交際というからには、お互いに往來する事を意味するわけでしょう。もちろん文通も一種の交際法でしょうが、しかしこれは遠く離れていて容易に往來の出来ない場合のことであり、かつそれは嘗ては互いに親しく往來したことのあつて、あるいはまた結婚や転任などによる間か、あるいはまた結婚や転任などによつて、遠く離れた場合に行われるのが普通で、始めから文通だけの交際というものは、一種の例外的な場合に過ぎないと言つてよいでしょう。そこで交際するといふ以上、お互いに時々往き來をするわけがあります。

さてこのお互いの往き來ということですが、女同士の交際においては、男子の場合と比べて遙かに重大な結果を生じ易いといつてよいようです。と申しますのも、元來男子というものは外で働くもので、家を守るということは、直接その任ではありません。ですから男子はたとえ人を訪問しましても、その為になが家が

空いて困るの、またその留守がどうのというような問題の起こることはないわけです。しかるにひと度それが女性の場合となりますと、今さら申すまでもないことですが、女性というものは元來家を守るのがその役目ですから、たとえ近距離であつても他家を訪ねるといふことは、そのままわが家を空けるということになるわけです。かりに女中のいる家にしましても、一家を明けて女中委せではどうも困るわけです。と申すのも女中だけでは、かりに來客があつたとしても、たちまち困つて了います。このような点からして女同士の交際は、よほどその範囲を狭げねばならぬといふ事がお分りでしょう。さらにまた一家の主婦となつては、

自分の友だちとの交りのみならず、主人の先輩や知友にあたる人々との交際で、時には忙しい主人の代理として心を配る必要があり、さらに主人の名代として、他家を訪問しなければならぬ場合も、少なくないことでしょう。してみると、もとと家の出にくい女性の身として、また只今も申すように、主婦としての当然の責任としての主人の交際範囲がありますから、その上に自分だけの知り合い関係といふものは、あまり手広くすること

は出来ないことがお分りでしょう。

■範囲の問題

そもそも交際というものは、広くて浅いのより、たとえ狭くても深く細やかな方が望ましいと言えましょう。もちろんこれは、一般的に男女共に当てはまることですが、しかし以上述べたような理由からして、この点は女の人によつて、とくに大切な心掛けだといえましょう。しかるにこうした点を知らないで、まるで男子と同じつもりで交際を手広くいたしますと、色々と支障を來たすようになりやすいわけです。もつともあなた方のうちに、將來職業を持つて、一おう自分の収入を持つてゐる人の場合は、独身時代はそれでも一応やつて行けましようが、結婚後もさういふつもりでいまして、色々と支障が起きるといつてよいでしょう。それと申すのも、妻の昔の交際範囲が広過ぎますと結婚後もやれどこの出産祝いに贈り物をしなければならぬとか、やれ誰さんの姉妹の結婚祝いを送らねばならぬとかいふ風に、夫の一度も見たことのないような人々に対して、わずかな収入の中から、次々と贈り物をするといふことにもなりましよう。そして、さうした

ところから、とかく夫婦間の物言いの端
が開かれがちなものであります。たとえ
収入はわずかでも、せめて平生家計を引
きしめて、多少の貯蓄でもしていればと
にかく、そうした女性に限って、平素の
家計もとかく不締りがちなものでありま
す。

平成29年10月1日発行
16号 巻通
もつた物であればまたとなく有難くかつ
喜ばしいものですが、もしそうでなかつ
たら、贈る側としても、また貰う側にし
ても、共に無用な失費といつてよいでし
よう。と申しますのも、貰った側として
は、まつたくの貰いつ放しにもできず、
やはり適当な返礼をしなければならぬで
しょう。ところが、一般に贈答の行われ
るような場合は、それがお産にせよ結婚
にせよ、ないしまた葬式にもせよ、それ
自身相当な物入りの場合であります。そ
の上に、そうした場合にもらう物は、大
たい決つた品が多くて、現に出産の場合
など、ベビー服ばかりを十幾つも貰つて
始末に困つたという話さえあります。(一
同笑)これは都会地では如何にも有りそ
うな話であります。以前田舎では子ども
の出産祝いにも、三四歳頃になつて初め

て着られるような反物を贈つたりしたも
のです。しかし今日都会では、たいてい
皆ベビー服ばかりということになりがち
です。そこで実用からは、色々困るよ
うな品を貰いながら、相当の入費の他に、
それらのお返しもしなければならぬとい
うわけです。こういうわけですから、交
際範囲をむやみに拡げるといふことは、
家そのものとしても、元来差し控えるべ
きことですが、とくに女同士の交際範囲
となりますと、その点はよほど慎重に考
えなければならぬと思うわけです。と申
しますのも、夫の交際の方は、職業やそ
の役目上、どうにもならない範囲がある
からです。そもそも交際というものは、
吉凶の際などに一度贈り物を受けますと、
その時一度だけでは済まず、その後引
きつづき贈答を交わすことになり易いも
のですから、ただ好意として贈りさえす
ればよいとのみ言えないわけであります。

■コトバ・女話の問題

以上は、以前の友だちを中心とする交
際について申したわけですが、現在隣り
近処、あるいは子どもの友だちの親達と
の交際においても、女同士の交際という
ものは、色々注意を要する点が多いと

いえましよう。ことに人の噂話とか、蔭
口に類するコトバなどは、これを他の人
に伝えないように……という注意などは、
最も大切なことと申してよいでしょう。け
だしそういう種類の事柄は、たとえ悪気
はないとしましても、或はまたその事自
身に偽りはないとしても、とかく女同士
の間では、重大なもつれの原因となり
がちだからであります。この点については、
以前にも一度申したことがありますので、
今日は触れることを控えておきますが、
これなども結局は交際の範囲を、あまり
手広くしないように、先方の人柄をよく
吟味して、深く細やかに、真実を尽くし
て交わるといふことが大切だといえまし
よう。でないと、女同士の交際上のもつ
れから、意外な波紋が御主人の職務上
にも及ぶという場合も、広い世間には少な
くないといつてよいでしょうから……。

(修身教授録第四卷昭和15年5月発行同志同行社)

健康について (微言)

森信三

○幸福の根底には健康がある。幸福が各
人の充ち足りた状態とすれば、健康はそ
のような自己充足を成立せしめる現実的

身体的基礎といつてよい。

○ところが大切なことは、健康そのものが、それ自身ひとつの自己充足だということを知らねばならぬ。

○健康とは一体何であるか。それは必ずしも強健及至は強壯と同一ではない。人は強壯でなくともまた強健でなくともよく健康たりうるのである。

○では健康とは一体如何なることであるか。それを、身心の調和といつては悪いであろうか。

○強壯とか強健と力いうことは、言い換えれば体力が強いということであり一体力が強いということは、力仕事が平気で出来るとか、長い通が歩けるとか、勿論比較的病気になるににくいということなども含むであろう。

○しかし健康ということは、力ということには直接には関係がなく、比較的病気になるらぬという後の方が強いといつてよからう。

○然るに病気になるらぬということは、身心の調和と平衡とが比較的良く保たれていふということだといつてよい。何となれば、病氣と心身は心の調和が破れ、その不均衡だからである。

○随つて頑健なる者必ずしも健康とい

えないと共に、健康なる者必ずしも頑健とは限らない。頑健の特徴は力にあり、健康の特徴は調和にあるからである。

○随つて健康を保つためには、必ずしも強度な運動を必要としないといつてよい。静坐とか坐禅などでも、よく健康を保ちうるとせられるのはこの故である。否、適切なる呼吸法そのものによつても、健康を保ちうる場合が少くない。

身心の調和を破るものは、無理である。随つて健康にとつての最大の敵は、「無理」である。

○ところが強壯頑健のためには無理は必ずしもこれを却けるわけにゆかない。無理を克服するところに、強壯頑健な身体は得られるとも言えるからである。

○長寿は必ずしも強壯頑健に屈するものではない。否、多くの場合頑健な体躯の持ち主は、多くは余り長寿でないのを常とする。

○かかる人たちには、これを不思議とする人もあるかと思うが、これは「太くて短い」という天理によるものである。

○少青年時頑健な体質の人で、八十以上の長寿を保つ人は大体三割くらいといつてよからう。その他は概して短命である。

○身体を積極的に鍛錬して頑健に至らん

ことを期するもよいが、静かに自らに与えられた生命力を、身心の調和を保つて、長寿を期することはそれ以上に望ましい。

○四十歳までの健康は、生れつきの体質による処が多いが、四十歳以後の健康は、主としてその人の努力修養に基づくといつてよい。こう考えて来ると長寿も人間の徳の一つの現われといつてよい。

〔開頭〕昭和26年5月号 通巻48号〕

あとがきに替えて

森信三先生の女性観はその孕みの能力の重視からである。この男性との差異は如何ともし難いという認識。神の配剤の為せる業という観点からも来ている。そう理解しないと森信三先生の心懐には達せないだろう。

(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-451342
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn